

後拾遺集時代の和歌にみる信濃の歌枕

西山秀人

はじめに

一一世紀末、白河天皇の命により編纂された第四番目の勅撰和歌集『後拾遺和歌集』には、次の歌が収められている。

はらからはらからなどいはむといふ人の、しのびてこむといひた
るかへりるかへりことに
相摸

あづまぢのそのはらからはきたりともあふさかまではこさじ
とぞ思おもふ（巻十六・雑二・九四一・相摸）

当代屈指の女流歌人、相摸の作で、お互いに「はらから」兄妹と呼び合おうと言った人が、人目を忍んで通つて来ようと言つてきた返事として詠まれた歌である。「そのはらから」には東山道に接する信濃国の歌枕「園原」と「はらから」を言い掛け、下句は「園原」に対応させる形で近江国の歌枕「逢坂の関」を詠み込

んで、「たとえあなたが訪れたとしても、男女が逢い合うという名を持つ逢坂の関を越えるようなことはありませんよ」と、男の来訪を拒絶したもののだが、ここで注目したいのは二句中の「そのはらから」という掛詞表現である。

「園原」は東山道第一の難所である神坂峠の麓、現在の下伊那郡阿智村園原周辺に位置し、遠くからは見えるが近づく³と消えてしまつたという帚木にまつわる伝説を伴った歌枕である。延喜五年（九〇五）開催の「右兵衛少尉貞文歌合」の出詠歌

a そのはらやふせやにおふるははきぎのありとてゆけどあはぬ
きみかな（不会恋・右・二八ノ古今六帖ノ新古今集・是則）
が現時点での初出例であり、以後、一〇世紀後半から諸歌集に散見されるようになる。「帚木」「伏屋（ふせや）」とともに詠まれることが多く、「園原」に「その腹」を掛けた遊戯的な歌もしだ

いに現れるようになるが、「そのはらから」という詞句は今のところ 相模詠以前の用例を探せない。ちなみに、の詠作時期は流布本『相模集』の排列をもとに、作者が相模国から上京した万寿二年（一〇二五）から夫大江公資との離別が確定的となった長元四年（一〇三一）頃までとみておくのが穏当かと思われる。果たして「そのはらから」が相模創始の表現であるかは不明だが、後述するように一一世紀中葉、藤原道長の息頼通の時代には、和歌六人党やその周辺の歌人たちの注目を集めていたことは確かだといえよう。

『後拾遺集』の成立から遡ること約八〇年、『拾遺集』の時代は歌枕の整理交替期にあたり、新たな歌枕が数多く登場する一方、既存の歌枕についてもその詠法が見直されつつあった。歌人たちは歌枕にひととき関心を寄せるようになり、そうした機運が一一世紀中葉における名所題の流行を招来したのである。歌枕が歌語の一範疇を超えて名所へと昇華していく過程において、歌壇では「祐子内親王家名所歌合」（長久二年（一〇四一）・康平四年（一〇六一）カ）を筆頭に種々の試みが行われてきたわけだが、その中で信濃の歌枕はどのような消長を見せているのだろうか。本稿では先学の驥尾に付して、和歌六人党ほか頼通時代の歌人詠に見出される新たな歌枕表現のうち、信濃の歌枕に関わる例をい

くつか取り上げ、その時代的特徴を出来る限り明らかにしてみたい。

一、「はらから」の掛詞表現

興味深いことに、「園原 はらから」という掛詞表現は、上掲相模詠のほか、次掲のように和歌六人党とその周辺の歌人詠に集中して現れる。

はらからに、ふみやるとききて、かく

あつまぢのそのはらからをたづめともいかにしてかはせきも

とゞめむ（範永集 八八）

かへしにいひやる

はゞきゞのそのはらからにたづぬればふせやにおふるしるし

とを見む（同 八九）

あるみやばらの女房のもとに、ふみなどやるを、さとな
る人のはらからのあれば、なにことも、かくれあらじと
いふをききて

しなのぢやそのはらからをみる人はあふちのせきはこえぬも
のかは（経衡集 一七四）

これをきゝて、おなじみやの人なるべし、かうづさの君
みるごとにおもてぶせやといふなれはそのはらからはとがめ
しもせじ (同 一七五)

やまなりしはらからの、はゞきにくだりてなくなりたり
しに、心もなくさめむとて、いとまにてさとにあるほど、
なにはわたりに、かねつなの中將の、むすめのきみなど
くしてくだりて、天王寺まうでもせんとてありしに、き
ぬのいろかへしほどに、春宮の大じんたかつね

あづまのそのはらからのつゆけさはふぢのころもをきてや
すつらむ (下野集 一一二)

返し

はゞきにありときかねばあづまぢをかくるにいとゞつゆぞ
こぼるゝ (同 一一二)

『範永集』所載の、は詠作事情が今一つはつきりしないが、
ある人物の「はらから」をめぐって、その人物と範永との間に交
わされた贈答歌と思しい。は、範永が「はらから」(女性であ
る)に手紙をやると聞いて、「あなたが私の「はらから」のま
とを訪れたとしても、どうして関所のようにせき留めることがで

きましようか」と詠み贈ってきたもので、末句「せきもとどめむ」
には男女が相逢う意の「逢坂の関」を暗示させる。それに対する
範永の返歌は、上掲aの古歌を踏まえ、「近づくと姿を隠して
しまつという帚木で有名な園原 あなたの「はらから」を訪ねて
みれば、古歌に詠まれているとおり、逢えないしとして見る
ことでしよう」と、相手をなだめるような詠みぶりである。は

と上二句を同じくし、なおかつ三句中に接続助詞「とも」を用
いていることから、相模詠との間に何らかの影響関係が想定され
る。・は後朱雀天皇第三皇女、祐子内親王に仕える女房たち
との贈答歌で、の後は「末の松山」を詠じた贈答一首がさら
に続く。祐子内親王の誕生は長暦三年(一〇三八)四月二二日で
あることから、この贈答歌はそれ以降の作ということになる。

は「園原 その姉妹を見ているあの人は「園原」の近くにあって、
「逢つ」という名を持つ「あふちの関」を越えないことがありま
しょうか」と、女との逢瀬を期待する心を詠んだもの、は同じ
宮付きの上総の君なる女房の返歌で、「見る度に不面目だと言っ
ているようですから、その姉妹はあなたが訪れても咎め立てしな
いでしようよ」と、二人の関係を肯定したものと解される。『範
永集新注』が指摘するように、は『範永集』の、と用
語・表現はもとより詠作事情まで近似しており、「私的な会話を

受けての複数の人が歌を詠む場面でもあり、この場に範永が同席し、当該歌を詠んだ可能性⁽¹⁰⁾も想定されよう。は春宮大進隆経が、摂津に逗留していた下野に詠み贈った歌で、比叡山に籠っていた下野の兄弟（律師行政か）が、伯耆国で没したことを悼んだものである。初句「東路の」は地理的にそぐわないが、おそろく

ははきのくにはべりけるはらからの、おとしはへらざ

りければ、たよりにつかはしける 馬内侍

ゆかばこそあはずもあらめははきぎのありとばかりはおとつ

れよかし（後拾遺集・雑一・八七六）

などの先例を踏まえ、伯耆「鬮木」「園原」という連想をもつて一首をもしたのであろう。『新大系』が指摘するように、「東路の」は「そのはらから」の序と見ておきたい。その上二句は相模詠・『範永集』のと一致しており、何らかの影響関係を想定してよいものと思われる。の詠作時期は判然としないが、寛子の入内が永承五年（一〇五〇）なので、少なくともそれ以降の作であることは確かであらう。

このように見ていくと、「そのはらから」の掛詞表現は、相模及び彼女と親交のあった範永・経衡らの周辺でまず共有され、次いで下野の周辺で撰取されたものと考えてよさそうである。その後しばらくの間は和歌史上に現れないが、平安末期に至り、

したしき人にかくすこひ

うちとけてふせやといはむことはをそのはらからにちらさ

すもかな（有房集 三三三）

おと¹¹にてはべりしときふさの大夫 うせてはべりしい

みのうちへ、もりとき入道がり申つかはし、

うつせみの たまのゆくえは しらずして……たらちをに

さきだちてゆく ことゝまた あづまのかたに ありときく

そのはらからの そのなかに まづはくきとを なげかせて

ねにかへりぬる このもとは……（同 四三七）

のように、有房詠に撰取されることとなる。

ここで注意しておきたいのは、「はらから」を掛詞とする詠法が、

民部丞清原のもとすけが¹²おとつと、¹³がくさつもとさね

あぎなせいようみまかりてのち、はふりするまできかず

ありて、おそくきゝたるよし、もとすけにいひつかはす

りよひのまもそらのけぶりとなりにきとあまのはらからなどが

つげこぬ（順集 三五／後拾遺集・哀傷・五五九）

のように、十世紀中葉の和歌からすでに用いられている点である。

右歌は清原元輔の弟、学生元真の訃報を後になって耳にした源順

が、どうして知らせてくれなかったのかと元輔を恨んだものだが、

「天の原」に「はらから」を言い掛けたところに順ならではの機

知がうかがえる。右歌が『後拾遺集』に採られていることは、上述した「そのはらから」の流行と無関係であるとは思われない。他にも『後拾遺集』には、

はらからはべりけるをむなのもとに、おとをおもひかけて、あねなるをんなのもとにつかはしける

読人不知

をぶねさしわたのはらからしるべせよいづれかあまのたまもかるつら（恋一・六一六）

と、思いを寄せる女性の姉に仲立ちを依頼した男の歌が収められているが、これは「わたの原」に「はらから」を掛けたものである。また、『四条宮下野集』には、

あまのりといふものを、あまなるはらからにやるとて
すくぶべきあまのりをこそたづねつれわたつみふかきみには
とおもへば（一三三）

返し

あまぶねにわれのりえたるしにはすくはざらめやわたのはらから（二四）

の例もある。とすると、「はらから」の掛詞表現は後拾遺入集を果たした順詠bを淵源とし、六人党周辺の歌人たちによって「そのはらから」「わたのはらから」といったバリエーションが生み

出されていったのではないかという推測も、あながち的外れではないだろう。例えば、『相模集』に見える「ある所に庚申の夜、天地をかみしもにてよむとて、よませし、十六」、即ちあめつち詞を順に歌の上下に据えて詠ませるといふ文学的遊戯が、『順集』所載の「あめつちのうた四十八首」を踏まえたものとするれば、順の歌は当時の歌壇から一定の注目を集めていたとも考えられそうである。後拾遺時代における「はらから」表現の流行は、やはり順歌bへの注目がその契機となったのではあるまいか。

ところで、上掲『経衡集』の「は、あふちの関」なる珍しい歌枕を詠み込んだり、不名譽・不面目の意の「面伏せ」に「ふせ屋」を言いかけたりと、遊戯性が際立つ贈答となっている。次節ではこれら両詞句について考察を及ぼしてみたい。

一、「あふちの関」と「おもてぶせや」

和歌本文のみを改めて引こう。

しなのぢやそのはらからをみる人はあふちのせきはこえぬも

のかは（経衡集 一七四、経衡）

「あふちの関」は東山道に置かれていた小関で、和銅年間七〇八〜七一五）以後八十年ほどは存続したらしい。その位置は東山道

阿知駅の付近、長野県下伊那郡阿智村大字駒場周辺が比定されている。『能因歌枕』「国々の所々名」には「…さらしな あふちのせき はゞき」をはずて山…とその名が挙げられているが、平安時代の和歌用例としては上掲と、遅れて和歌六人党のメンバーに加わったと思しい橋為仲の、

十月つごもりごろにゆきふりたるに、しなのゝかみたか
もとがまつできてあそびしに

おもひきやこしぢのゆきをふみわけてきませる君にあはんも

のとは（為仲集 一一）

かへし

いまさらになとおもひしみちなれどきみにあふちのせきぞ
うれしき（同 一一）

を見るのみである。は経衡詠 よりも少し後の作とみられ、為仲が越後守在任中の延久元年（一〇六九）から同四年までの間、為仲が信濃国に旅した折に、信濃守たかもと（伝不詳）が為仲を訪問した折の詠である。たかもとの「思ひきや」の歌は、滝澤貞夫が指摘するとおり、在原業平の絶唱

わすれては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むと

は（古今集・雑下・九七〇・業平／伊勢物語・八三段）

を踏まえての詠であろう。それに対する為仲の返歌は、信濃の名である「伊那」に「否」を、同じく「あふちの関」に「会つ」意を掛け、今さら都から遠く離れた国は、伊那ではないが「否」と思った越後への道でしたが、「あふちの関」こうしてあなたに会うことができ、嬉しく思います」と詠んだものである。下句はおそらく、

さみだれにこひすといふなはたたばたて君にあふちの花し咲

きなば（古今六帖・六・棟・四一九）

名に頼むわれも通はむ逢坂を越ゆれば君にあふみなりけり

（平中物語・二五段）

など、「君に会ふ」と「棟の花」、「君に会ふ身」と地名「近江」を掛けるという先蹤歌の手法を応用したのであるが、表現的にはよりもこなれているような印象を受ける。

その後、「あふちの関」は中世和歌において、

eしなのぢやかよふ心はありながらさもぞあふちの関はさびし

き（宝治百首・恋二十首・二六一七・蓮性）

むすびをく契のす糸のたがはずはいつもあふちの関はこえな

ん（時朝集 六五）

のように詠まれることとなるが、eの初句はと同じく「信濃路

や」であり、しかもeは「さびしき」、は「うれしき」と、もに歌末を形容詞の連体形で結んでいる。おそらくeは・西作を念頭に置いた詠ではなからうか。仮にそう考えてみると、宝治百首が披講された宝治二年（一二四八）頃においては他の「あふちの関」詠が流布しておらず、eの作者運性は・からこの珍しい地名を撰取したという推測も成り立ち得よう。

ともあれ、「あふちの関」は六人党の一部歌人に注目されたものの、当代の歌壇には浸透することなく、一過的な試みに終始してしまつたよつである。

次に、「おもてぶせや」について見ていきたい。

みることにおもてぶせやといふなれはそのはらからはとがめ
しもせじ（経衡集 一七五、上総の君）

「ふせ屋」は本来歌枕ではなく、難所に設けられた緊急用の宿泊施設である。「布施屋」を指したもので、「園原のふせ屋」は、神坂峠を越える旅人の便宜を図るべく最澄が造立したと伝えられる広徳院のことと考えられる。しかしながら、文学の世界では源氏物語』の、

数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木

（「帚木」巻、空蟬）

のよつに、「布施屋」の実態から離れて、「伏屋」即ち軒の低い、みすばらしい小家の意に用いられることも多く、地名の「園原」と同義に扱われることもあつた。本節では「ふせ屋」を歌枕と同様に見なした上で、以後の考察を進めることにしたい。

上述したよつに、は「おもてぶせ」に「伏屋」の意を言い掛けたものだが、「ふせ屋」自体にそれほど意味はなく、「そのはらから」に掛けられた「園原」と対に用いることで表現効果を高めよつとしたものとみられる。「おもてぶせや」の和歌用例は少なく、以前のものとしては、

はうへのほかにわたり給て、人に物いはぬをこなひに
て、ひさしうたいめしたまはで、かへりわたりたまひて、
けふなむいとまあきたるときこえ給けるに、いそぎまい
りたまひけるに、人の又御いとまふたがりてときこえけ
れば、かへり給にけれを、うへはいとまちどをにおぼし
て、かくきこえ給ける

f「このもとにきても見がたきは、木々はおもてぶせやと思なる
へし（定頼集 一三三）

御返し

g見えがたきは、木々をこそうらみつれそのはらならぬ身かは

とおもへば (同 一三三)

を見出すにとどまる。fは行き違いのために息定頼に会えなかった母親からの歌で、「こ(木)のもと」に「子」を、「はゞ木」に「母」を、「おもてぶせや」は「面伏せ」と「伏屋」を言い掛け、なかなか会えないような母親では面目だろうと息子をいたわっている。一方、定頼の返歌gは、贈歌同様「帚木」に「母」を、地名「園原」に「その腹」の意を掛け、実子であるはずの私の前になかなか姿を現さない母上を恨んでいたと冗談まじりに応じたものだが、で用いられた「おもてぶせや」「そのはらから」の取り合わせは、あるいは上掲f・gの贈答歌を念頭に置いてのものではなからうか。歌枕の常識をくつがえす定頼の機知あふれる詠みぶりは、後続の歌人たちにも注目されていたとみておきたい。なお、「おもてぶせや」は、後世、

もの申ける人のはゞに申べき事のありて、まかりてたづねけるに、たび／＼なしと申てあはせざりければ、つかはしける

はゞきゞはおもてぶせやとおもへばやちかづくまゝにかくれゆくらん (散木奇歌集「俊頼」 一〇五五)

と、俊頼詠にも用いられているが、表現面から見て、この歌も定頼詠fに依拠した可能性が強そうである。

このように信濃の歌枕のみを取り上げても、六人党とその周辺歌人詠からは、新たな歌枕表現を開拓しようという意気込みが十分に伝わってこよう。上掲「あふちの関」のように後拾遺時代に至って発掘されたとみられる信濃の歌枕は他にも散見されるが、次節ではその中でも「風越の峰」を取り上げたい。

三、「風越の峰」

「風越の峰」は飯田市の西方にそびえ立つ風越山を指し、『和歌童蒙抄』第六には「かざこしの峯は信濃の国にあり。風常に吹おこす処なり」とある。現存資料では次掲の家経詠が初出であるが、『袋草紙』で古歌として挙げられているhの存在も看過できない。

しなのにくだるみちにて

かざこしのみねのうへにて見るときはくもはぶもとのものにぞありける (家経集 二ノ詞花集・雑下・三八九ノ玄々集)

住吉の神主国基、良暹が歌を難じて云はく、「まくりでと云ふ詞やはある」と云々。良暹云はく、「やしほの衣まくりでにして、如何」。国基云はく、「僻事なり。紅にはまぶり

でと云ふ事あり。それを書き誤るなり」と云々。良運暫く案じて、また云はく、

h 「かざこしの峰よりおるるしづの男の木曾の麻衣まくり
でこつて

と侍るは、これもまふりてを誤るか」と云々。国基閉口すと。

(袋草紙・上・雑談)

は、長元五年(一〇三二)信濃守に任せられた藤原家経が、下向の途次「風越の峰」の頂上に憩つての作とされる。たしかに『詞花集』の詞書には、「しなののかみにてくだりけるに、かざこしのみねにて」とあり、山上からの眺望を詠んでいることから、家経の実体験にもとづく歌と考えたくなる。だが、風越山は標高一五〇メートル級の山である。家人や供人を従え、難儀しながらようやく御坂峠を越えてきた家経が、歌枕探訪のためにわざわざ山中に分け入ったとは考えにくい。おそらくは、『和歌文学大系』が参考歌として挙げる、

むまにのりたる人、二人とをる、山をこゆ

ふもとにてそら^にをみえつるむらくもふむばかりにもなりに

ける哉 (嘉言集 一一八)

などの先行屏風歌を念頭に置きながら、想像上の風景を詠んだも

のではなからうか。

ところで、上掲『袋草紙』の記事は、家経とほぼ同時期に活躍した良運と津守国基の論難にまつわるエピソードだが、その中で良運が自詠、

そでふればつゆこぼれけり秋のはまくりにてぞゆくべか

りける (後拾遺集・秋上・三〇八)

の証歌として挙げた古歌がhである。「しづの男」はここでは木樵を指し、「麻衣」は麻織りの粗末な着物、「まくり」は袖をまくり上げる意に用いられている。もしも、hが以前の作であるとすれば、家経はhから「風越の峰」という山名を学んだのかもしれない。そして、信濃下向の折には東山道沿いにその山容を望みながら、峰頂からの俯瞰に思いを馳せてを詠じたのではなからうか。家集詞書の「道にて」という表現は、そうした事情を示唆しているようにも思われる。

その後、「風越の峰」は、

郭公声幽

かざこしをゆふこえくれば時鳥ふもとの雲の底に鳴なり

(清輔集 六九)

冬月

しろたえの雪ぶきおろすかざこしのみねより出る冬の夜の月

(同 二一七)

法性寺撰政家月の歌あまた、歌よみを撰て、五人によめ
と待りにしに、まいりて

かざこしの雲吹はらぶ嶺にてぞ月をばひるの物としりぬる

(林葉集・三・秋・四三三)

花泛澗水

たに河のながれやいづくかざこしの峯より花の浪ぞしづめる

(教長集 一四四)

のように詠み継がれ、歌枕として定着をみるに至る。その詠法は
に倣つて「雲」を詠むことが多かったが、しだいに「月」「花
(桜・梅)」などとバリエーションが広がっていく。これまで陽の
目を浴びることがなかった「風越の峰」を、山上からの俯瞰とい
う視点で捉えた家経の試みは、和歌史的には成功を収めたといっ
てよいだろう。そうした意味では、歌枕として普遍化し得なかつ
た前節の「あふちの関」とは対照的な行き方であるといえよう。

おわりに

本稿では後拾遺集時代 とくに和歌六人党とその周縁の歌人詠
にみる信濃の歌枕に焦点をあて、「そのはらから」「あふちの関」

「おもてぶせや」「風越の峰」といった新たな歌枕的表現を考察
することで、その時代的特徴を探り出そうとした。結果、次のよ
うなことが指摘された。

「そのはらから」の掛詞表現は、まず相模及び彼女と親交の
あつた範永・経衡によつて共有され、次いで四条宮下野の周辺
で撰取されたと思しい。「はらから」自体の掛詞表現は、源順
の歌を淵源とし、六人党周辺の歌人たちによつて「そのはらか
ら」「わたのはらから」といったバリエーションが生み出され
ていったと推測される。

経衡・為仲詠に詠まれている「あふちの関」は、『能因歌枕』
にその名を留めながらも、先行詠が見出せない歌枕である。為
仲詠は経衡詠よりもこなれた表現となっているが、結局、歌枕
として普遍化することはなかった。

「おもてぶせや」と「そのはらから」の取り合わせは、『定頼
集』所載の贈答歌から着想を得たものではないか。

和歌六人党とその周辺歌人詠からは、新たな歌枕表現を開拓
しようという意気込みが感じられる。家経が詠んだ「風越の峰」
もその一つである。山頂からの眺望という視点をを用いた家経詠
の試みは、後世の歌人たちに評価され、歌枕として定着をみた。

・ は、この時代に登場した歌枕の消長が対照的に示されているが、こうしたケースは信濃の歌枕にとどまらず、他の歌枕においても見出されるものであった。²²⁾ つまり、本稿で指摘した信濃歌枕の特徴は、後拾遺時代の歌枕表現全般に通じるものとして位置づけられるのである。

上述したように、この時代は歌枕への関心が高まりを見せ、歌人たちは新たな歌枕表現の創出に向けて試行錯誤を繰り返していた時期でもあった。「そのはらから」「や」「おもてぶせや」といったレトリックは、言語的側面から既存の歌枕表現に新たな可能性を見出そうとしたものであった。とともに、歌人たちの中には歌枕を實見し、その場で詠歌をものすることに執心する者も現れてくる。上述した橘為仲の信濃への旅は、能因の足跡を追つてのものともみられ、²³⁾ 前節で見た家経の歌も、「風越の峰」を道中実見したという体験に裏打ちされてのものである。名称への興味と実体への関心のせめぎ合いの中で、新たな表現映像を創出しようとしたのが、名所題という方法であったともいえそうだが、この点についての考察は他日を期したい。

【注】

- 1 以下、和歌の引用は、勅撰集・私撰集・歌合は『新編国歌大観』、私家集は『新編私家集大成』(ともに「日本文学web図書館」古典ライブラリー)に拠る。ただし、読解の便を考慮し、私に清濁・読点を施し、表記を改めた箇所がある。散文学作品の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)に拠る。
- 2 『相模集』(相模 一三二)の詞書には「はらからとのみいふ人の、せきのひまあらむおりはといふもあやしければ」とある。
- 3 『実方集』に次の例がある。「おなじ中将とふして、さうざしうもあるかな、女房のおきたるところやあると、みよとて、人をやりたれば、かへりて、あなはらいたとの給、人のおほく、こゑのみなんしつるといへば、そのはらやいかにかましくおもふぞもぶせやといはむこゝろやはなき」(一七八)、「右大将のもとに侍し女に、しのびてものいひ侍しを、はらみ侍にけるを、かくし侍しかば、つものくにのたれとふしやのふしかへりそのはもさへはたかくなりしぞ」(二七〇)。
- 4 武内はる恵・林マリヤ・吉田ミズズ『相模集全釈』(風間書房 一九九一)では、流布本(相模)「八三丁一三八番歌を「上京後から夫との離別頃まで」の歌とする。

5 和歌六人党のメンバーは資料により若干の相違が見られるが、犬養廉「和歌六人党に関する試論」(『国語と国文学』三三巻九号 一九五六・九)『平安和歌と日記』笠間書院(二〇〇四所収)に従い、藤原範永・平棟仲・源頼実・源兼長・藤原経衡・源頼家を主要メンバーと見なし、橘為仲は後年補充されたとする立場をとる。

6 久保木秀夫「『更級日記』上洛の記の背景 同時代における名所題の流行」(『更級日記の新研究 孝標女の世界を考える』新典社 二〇〇四)は、一世紀中葉に名所題による歌会・歌合が急速に増加したことを指摘し、そうした風潮が「公任や能因によって端緒が開かれ、主に六人党周辺歌人によって培われていった」と推測する。

7 小町谷照彦「三代集の名所歌枕 古今的美学の一考察」(『常葉女子短期大学紀要』一 一九六八・一一)、田尻嘉信「名所とその歌」(『和歌文学の世界 第五集』笠間書院 一九七六所収)、渡辺輝道「名所歌枕からみた後拾遺集」(『高知大國文』一一 一九八〇・一二)、同「後拾遺集の歌枕用法 三代集との共通歌枕を通して」(『高知大國文』一四 一九八三・一二)、百目鬼恭三郎「後拾遺時代における歌枕の創出」(『共立女子短期大学(文科)紀要』二九 一九八六・二) 阪

口和子「後拾遺集時代の歌枕 歌話から名所へ」(『和歌文学論集 六 平安後期の和歌』風間書房 一九九四所収)、『貫之から公任へ 三代集の表現』和泉書院 二〇〇一所収)など。

8 『範永集』所載歌の解釈に際しては、久保木哲夫・加藤静子・平安私家集研究会『範永集新注』(青簡舎 二〇一六)を参照した。

9 『経衡集』所載歌の解釈に際しては、吉田茂『経衡集全釈』(風間書房 二〇〇二)を参照した。

10 注8著書参照。

11 『新日本古典文学大系 二八 平安私家集』(岩波書店 一九九四)、『四条宮下野集』は犬養廉校注)参照。なお、『下野集』所載歌の解釈に際しては、安田徳子・平野美樹『四条宮下野集全釈』(風間書房 二〇〇〇)も参照した。

12 川村晃生校注『和泉古典叢書 五 後拾遺和歌集』(和泉書院 一九九一)に指摘があるのとおり、宮内庁書陵部(図書寮文庫)蔵四〇五・八七「後拾遺和歌抄」には「此歌在橘公頼卿家集」の動物が付されている(書陵部所蔵資料目録・画像検索システム <http://toshiryokunaicho.go.jp/> 参照)。

13 『後拾遺集』は順の歌を三首採歌している(四二五・五五九・

一〇一三)。

- 14 『阿智村誌 上巻』(阿智村誌刊行委員会 一九八四)第三編
第一章第二節・二・4 参照。
- 15 犬養廉「橋為仲とその集 古代末期の歌人像」(『国語と国
文学』三五卷二二号 一九五八・二二)、「平安和歌と日記」所
収、石井文夫「橋為仲集全釈」(笠間書院 一九八七)参
照。なお、『為仲集』所載歌の解釈に際しては、好村友江・
中嶋眞理子・目加田さくを『橋為仲朝臣集全釈』(風間書房
一九九八)も参照した。
- 16 滝澤貞夫「平安時代の戸隠史の文献」(『信大國語教育』三三号
一九九三・二〇)参照。
- 17 定頼詠にみる歌枕表現の特色については、拙稿「園原や伏
屋に生ふる帚木の 延喜五年貞文歌合の一首をめくって」
(信州平安文学研究会『平安文学 場と表現』所収 二〇〇
七)、「月を詠まない姨捨山の歌」(『所報 学海』創刊号
二〇一五・三)で言及したことがある。
- 18 『和歌童蒙抄』の本文は久曾神昇『日本歌学大系 別巻一』(風
間書房 一九五九)に拠り、旧字体は通行の字体に改めた。
- 19 『袋草紙』の本文は藤岡忠美校注『新日本古典文学大系 袋
草紙』(岩波書店 一九九五)に拠る。
- 20 千葉義孝「藤原家経年譜考証」(『短大論叢』六四・六五集合
併号 関東学院女子短期大学 一九八〇・一一)、『後拾遺時
代歌人の研究』勉誠社 一九九一所収)、「松野陽一校注『和
泉古典叢書 詞花和歌集』和泉書院 一九八八)参照。
- 21 『和歌文学大系 金葉和歌集・詞花和歌集』(明治書院 二〇
〇六)参照。『詞花集』は柏木由夫校注。
- 22 注7 阪口論文に詳しい。
- 23 注16 論文参照。